HANABI

palareru

　大きな音と光に、真っ暗な闇の中から引き戻された。

　ゆっくりと重い瞼を開けると、そこには優しい暗闇が広がってて又、大きな音と懐かしい光が壁に反射した。

・・は・・な・・び・・

そして、僕はまたゆっくりと瞼を閉じたんだ。

「今日は何処へ行くの？」、

人懐っこいその声が俺の背中に
まとわりつく。

「今日は大学だ・・」、

机に散らばった資料を集めながら
少し冷たく答えを返すと

「そっか・・」、

ギシっとベッドが軋み、もそもそ
っと布団が動く音がする。

コートを着ながら振り返ると、もう
その姿はずっぽりと布団の中に隠れ
つま先だけ・・

もじもじと動いているのが見えた。

「何か欲しいものでもあるか？」、

その答えはいつも同じなのだが一応
聞いてみる。

「何も・・ナニモイラナイ・・」、と

小さく呟いた彼はそのまま貝になる。

「いってくる・・昼には戻るから」、

俺はそう声をかけて部屋のドアを開ける。

振り返っても動かない布団。

ドアの外にあるパネルを操作し、暗証番
号をセットして、そのドアを閉めた。

俺の職業は大学教授。

表向きはね。

通常、俺の住んでいるこのエリアは
政府関係者のみが通過できる特殊な
パスと暗証番号、そして瞳認証が必要
な場所だ。

そして、そこは一部の関係者しか知る
事のない特殊な施設でもある。

「おはようございます」

警備員が瞬時に私の服装を確認して
その横にある機械へと促す。

「今日も鳴るかな？」、

「たぶん・・」、

その機会のゲートをくぐると真っ赤な
ランプが点灯し警報音が鳴り響く。

「はいはい・・・」、

毎朝のこの光景に周囲の物は慣れて
いるから立ち止まる者もいないが、

これも毎朝の光景で、警備室の奥から
バタバタと主任が飛んできた。

「おはようございます教授・・」、

そう言って、隣の特殊ゲートの鍵に
自分のカードキーを刺した。

「はいどうぞ・・」、

めんどくさそうにそのドアを開いて

「お戻りは？」、

自分の腕時計を確認した。

「昼には戻る予定です。」。

そのドアを通過しながらそう答えると

「食事中は勘弁してくださいね」、

主任はくるりと背を向けた。

毎朝セキュリティーが反応するのは
俺の体の中に、あの日の痕跡が・・

銃弾が、残っているから。

心臓に留まったその弾を取り出せば

多分死んでしまうと判断された俺は
あの日、そのままの状態で生死の境
を彷徨い続けて十日後に帰ってきた。

記念に残されたその銃弾は、今の処
俺と一緒に長い年月を生きている。

しかし、セキュリティーの厳しい現代
社会において不便なのは間違いない。

さて、大学へ向かうか。

大学と言っても俺の仕事は生徒に
何かを教えるわけではない。

今日は立ち合い・・と言えばよいか
まあ、あんまり気の進まない仕事だ。

「では、よろしくお願いします」、

生徒の代表が、大きな声でそう叫び
そのあとを追うように、次々と生徒
の声が聞こえる。

いつもより元気のないのは仕方の
無いことだが

今日の検体は見事に腐敗していた。

次々に部屋を出ていく生徒達。

間に合わず、水盤に向かって嘔吐
するものもいる。

希望して自らメスを握った生徒も
次々と交替し、数名がモウロウト
しながら格闘していた。

もう一人の立ち合い人、アースが
その姿を楽しそうに見ている。

まあ、この世界にいる奴はだいたい
変わってるわけで、奴も俺も昔から
この手の物を見ても何の感情も無く
ただ淡々と死因を見つめてきた。

アースの場合、難しければ難しい程
楽しいタイプなのでこの手の検体は
殆どアースの所に回している。

いつもなら、深夜のうちに一人で
楽しんで切り刻んで終わっているだ
ろうが、今日は生徒の実習が組まれ
ていたため、ノーマルな検体でその
欲求を仮押さえしてきたと思われる。

今は、生徒の限界を楽しんでいる訳
で、たぶんそろそろ全員ギブアップ
するだろう瞬間に備え手袋を嵌め始
めた。

「せん・・せ・・」、

最後の一人が、しゃがみこんだ瞬間

「４５分～！」、

ストップウオッチを俺に投げたアース
は、メスを握った。

「今日のは無理だろ？」、

アースが綺麗に並べた内臓を写真に
収めながら俺が言うと

「綺麗な遺体ばっかりじゃないだろ」

アースは腐敗した細胞を小瓶に取分け
ながら壁に張り付いている生徒達を
見回した。

「生きてる人間では勉強できない事が
この人から沢山学べるんだ、感謝して
記録しなさい。」、

俺の声に、生徒がよろよろと動き出す。

「じゃあ、俺は・・」、

アースは楽しそうに見分を始めた。

死因は、溺死。

死後３週間から１か月。

臓器にあった手術痕と、子宮にあった
リング。

捜索願の出されていた母親が、まだ
幼い姉弟の元に戻ったのはそれから
２週間後の事だった。

「最近検視してないんだって？」、

潔癖症の彼は、何回も指先を洗浄
しながら俺に聞く。

「ん、まあな・・」、

結局手伝った俺も、隣で泡にまみれ
ながら適当に返事をする。

「どうした？あんなに好きだった
のに、死体よりも好きなものでも
できたのか？」、

ニヤリと笑ったその瞳の中には何
かを知ってるとでも言いたげな、
むしろ言えよと脅迫めいたものが
見えた。

「そんなものはない・・」、

鏡の中でその瞳をきつくにらんだ。

「そういえば、最近料理をしてる
んだってなあ〜」、

大学のゲートでカードチェックを
受けてる俺の耳元でアースが囁いた。

「メス以外持ったことのないお前が
料理なんて・・お前、何を飼ってる
んだ？」、

足早に歩き出した俺の後ろにぴったり
くっついて来たアースは何もかも
知ってるような言い方をする。

「何も飼ってない！」、

振り返った俺に

「じゃあ、一緒にいこうかな〜」、

ポンッと肩を叩いた。

１０日に一度回って来る宿直。

この街は眠らない。

そして、次々起こる犯罪によって
次々とその命が失われる。

その数が膨大すぎて、いわゆる
不明体、明らかな自殺体などは
それを専門とする回収業者が街を
パトロールしてこの施設へと運ばれ
てくる。

それは記録写真と遺留品とＤＮＡと
簡単な検視で次々と保管され、一定
期日をもってダビに伏されていく。

ここは政府公認の施設で、ここでの
仕事はその遺体を割り振りする事。

ただ検視するのではなく、医療の為に
役立立てるのが表向きの理由だが、
多くはその道のプロたちの研究の為に
利用されている。

それを割り振るのが、この施設での
仕事だ。

緊急を要する案件・・顔紹介にて犯罪
に関係していると判断されたモノは、
その道のプロへ直ちに引き渡す。

そして、腐敗の進んだ難問系を得意とするアースのような特殊な物が好きな医師には、Ｘ（エックス）と表記されたモノが回される。

女性だけを好む医者やその逆を好む者。

更に鮮度を求める医者もいる。

それらがその検体をどうするのかは、定められていないので報告書を提出さえすれば何をどうしても良い事になっている。

それを許可された医師が１０名。

政府に任された極秘の任務の為にその貴重な検体を有効利用していると理解している。

日中は、振り分けをする職員が常駐しているのだが、夜間のみこの１０人で交代制にて振り分けをする。

それの意味する事は、容易に理解できると思うが、それぞれの用途にあった人選・・遺体選をする為だ。

各研究室への搬送も、夜間は厳しい検問もなくすむ。

運ばれてきた黒いビニールの中を確認して、取り付けられたタグとの照合をし直ぐに、それを好むと思われる医師へと連絡をする。

「無傷です。女性で金髪、２０～３０
代、服毒自殺と思われます」

Ｂ教授としておくが、

「直ぐに車を回します」、

彼は後日、私のポケットに封筒を入れる
事になる。

それが、今のこの街の中にある裏だ。

あの夜、俺の当直の夜。

「今夜はちょっと多いんです」、

そう言って作業員が台帳を持って
やってきた。

「順番に並べて下さい」、

運び込まれた黒い袋に向かった。

数体の振り分けを終え、次の袋に手を
かけた時、今まで味わったことのない
動機が私を支配した。

真っ白な肌。

長く伸びた黒髪。

真っ赤な唇。

Japanesedoll　・・・

手書きのタグを確認して、作業員の台帳
からそのNoを削除するまで私の鼓動は
まるで１００ｍ走をしているかのように
脈を打った。

「先生？具合悪いんですか？」、

助手が私の顔を覗き込む。

それほど、冷や汗をだらだらと流して
いたようで、なんでもない・・と必死に
誤魔化したのを覚えている。

いくつかの検体が運び出されて、私の
宿直時間が終わりを告げた。

自分の研究室へと運ぶロングカートを
運び入れ、目的の検体とダミーの検体
を詰め込んで

「それじゃあ、私の研究室へ一体運び
だしますね・・」、

受付の書類に検体のタグを記入して、
俺はその施設を後にした。

「今夜の検体ですか？」、

守衛が嫌そうにロングカートを覗き込む。

「ああ、一体だよ、見るかい？」、

にやりと笑って見せると、守衛はいいや
と首を振り、業務用のエレベーターの扉
を開けるパスを打ち込んだ。

「お休み・・」、

俺がそう言うと

「もう、おはようですよ教授・・」、

守衛は肩をすくめておどけて見せた。

よし・・・

俺の鼓動は又、走り出した。

どうでもいい検体は、すぐに冷蔵庫に投げ
その下に隠してきた黒い袋をベッドに乗せ
た。

軽い・・

でも、絶対に・・

そう

かすかに、その白い首筋が脈を打っていた。

点滴をつなぎ、傷を消毒して気が付いた。

驚くほど体中に傷跡があった。

でも、その傷の殆どが、たぶん名の知れた
者の手によって見事に処置されていて、

「こいつはヤバい奴を拾ったかもな・・」、

俺はごくりと唾を呑んだ。

俺の検体の条件は

成人男性。

それも、若ければ若い程受け入れた。

その検体で何をどう、研究しているか
そんなのは誰にも報告する必要は無い。

ただ、死因のみ報告して、最終的に
その検体をダビに伏せば良いわけで
秘密の戸棚の中には、コレクションが
ビンの中に漬かっている。

これでも俺は、泌尿器科の有名な研究者。

その構造や性能に興味を持ってなんら

不思議ではないからな。

「お前、どうやって楽しんでんの？」、

アースだけが、その趣味を知っていた。

「なあ、何を買うんだ？」、

大学から離れたショッピングモールにまで
ついてきたアースが、俺からカートを奪い
楽しそうについてくる。

「煩い、日用品だ！」、

そう言って、ボクサーパンツを投げ入れると

「おい・・」、

そのパッケージを掴んだアースが立ち止まった。

しまった。

そう、顔に出たのも・・しまった。

「生き物を飼うなんて、お前らしくないな」、

思いっきり茶化されるものと思ったのに
アースの口から出た言葉は、とても冷たく
真剣な瞳で俺を見た。

それから、無言で日用品・・・

シャツや、ズボン・・靴

俺のサイズではない、それらをカートへと
運び、最後にアースが視線で訴えたワイン
を入れてレジに向かう。

俺が今までに買ったことの無い高額の
ワインにあう、ツマミも投げ入れられた。

「サイズの方はよろしいですか？」、

白いデッキシューズを確認する店員が俺達
を見る。

二人とも大柄で、店員が手にしているその
靴は到底入らない。

「いいんです・・それはその・・」、

言葉を詰まらせると

「おつつみしますか？・・」、

サポートについた店員がニッコリと微笑んだ
ので

「お、お願いします・・」、

思わずそう答えてしまった。

ぷ・・

それまで機嫌の悪かったアースが思いっきり
噴き出して、必死に笑いを堪えていた。

車に荷物を載せていると

「お客様・・・」、

さっきのレジの店員が走ってきた。

アースが助手席から顔を出すと

「先ほどお買い上げ頂いた商品のサービス
品をお渡しするのを忘れていて・・」、

そう言って出されて箱の中にはカラフルな
キャンディーが入っていた。

「どれが好きそうですか？」、

彼女はにっこり笑ってそう聞く。

「そうだな・・・これかな・・」、

俺は、その中の一つを掴んだ。

”おかえりなさい”

研究室へ向かうゲートで退屈そうな警備員が
腰を上げた。

いつもの警報が鳴る前に、俺を横のゲートへ
目くばせしながら

「今日は、えらい荷物ですね・・」、

俺と、アースの抱えている袋を見た。

「悪いね、今日お泊りになるとおもうからさ
いろいろ買って来たんだ」、

そう言ってアースはがさがさと袋の中を
警備員に見せる。

「大丈夫ですよ、Ｘ線で見えてますから」、

横の部屋からアナウンスが響き、その声に
ニヤリと笑ったアースはゲートをくぐった。

勿論、俺にしかその笑みは見えてない。

「今夜は、もう外出されませんか？」、

キーをかざしに来た主任に念を入れられて

「ああ、こいつと会議だ・・」、

俺もアースの後を追った。

エレベーターの流れる数字を見つめていると

「問題は、ここか・・」、

アースがエレベーターの中をきょろきょろと
見回している。

「何を言ってる？・・」、

意味が分からず、キョトンとする俺に

「靴をプレゼントするって事は、ここから
出るって事だろ？」、

アースは俺にしか聞こえない様に

カメラに口元がばれない様に

俯いて、そっと言った。

部屋の前につくと、壁のパネルに顔を寄せる。

外出よりも入室の方が厳しくセットされている
この研究室。

中に入ってしまえば、そこには自由だけが
広がる。

どんな研究を、どんな検体で

どんな処置を、どんな方法で

全てが、自由だ。

ぴ！

開かれた一枚目のドア。

そして、次のドアに指紋とパスコードを打ち
俺達はその中へと進んだ。

「相変わらず、無機質な部屋だな・・」、

研究室の横にあるプライベートルームに入り
アースが舌打ちする。

人見知りな俺の部屋に上がり込んできたのは
今までにアースひとりだ。

そして、その先の寝室に入ったことのある奴
は誰もいない。

がさがさと買ってきたワインと食材をキッチ
ンへと運んでいる俺の後ろで、

「で？奥？」、

スタスタとアースが歩き出す。

「お。おい！」、

開くはずはないのに焦る俺を振り返った
アースは、にやにやしていて・・

「少し、待ってくれ・・・」、

俺は大きな溜息をついた。

研究室の壁一面に設置されて標本棚の中には
俺の研究対象がビンの中に入って並んでいる。

綺麗にそれが見えるように、ラベルは極力
小さく、かつ、邪魔にならない場所に張り
年齢順に棚の左から置かれている。

なぜ左かと言うと

年齢の低い方が、良く見るから・・・とでも
言っておこう。

そして、リビングのようなこの無機質な
部屋の中にも標本棚はある訳で

「毎晩これ、眺めてんの？」、

ワイングラスを揺らしながらアースがそれを
覗き込む。

この部屋に並べられているのは、まっさらな
対象の物。

顔写真がビンの中のそれに重なるようにその
後ろに飾られている。

「うるさい、研究していると言え！」、

俺は、冷やしてあったビールのプルを開けた。

ふ～ん・・・

そう言いながらアースは端からその検体を
眺めていく。

彼も研究者の一人である。

俺の趣味がどうこうあっても、それらの
検体に興味が無いわけじゃなく

「これで、１３歳？・・」、

小さく書かれている情報を確認していた。

俺は、電気コンロにかかっている鍋にひとつ
卵を落とし、くるくるとかき混ぜて

その電源を落とした。

「静かにしていろよ・・」、

ちらりと、アースに視線を送り、トレーを持ち
奥のドアへと向かい

ぴ！ぴぴ！　　俺はそのドアを解除した。

「ただいま・・」、

暗闇に、そっと声をかけた。

壁のスイッチを探し、すり足で横に動いた
俺の足に暖かな感触があった。

僅かに開いているそのドアから入った明りに
うっすらその影が見え

俺はゆっくりとそこに座り込む。

持っていたトレーは、横に置いて・・

「どうした？なぜ、こんなところに？」、

そう、声を掛けると

「広い部屋は怖いんだ・・」、

そう言って。ぎゅっと自分の膝を抱きしめる。

暗闇の中に広がる寝室は、そんなに広い物でも

ないのだが、きっとこの闇がその心を怖がらせ
ているのだと思う。

そっと手を伸ばし、パチっと電気をつけると

「あ・・」、

ゆっくりとその顔を上げた。

壁から動きたがらないその身体に薄いタオルを
羽織らせて、

「リゾット・・・の真似事・・」、

俺は、トレーを目の前に出す。

「・・おかゆ・・・じゃないか・・・」、

彼が発した言葉の意味は分からない。

たぶん日本語だろう・・

でも、嬉しそうに笑って、ゆっくりとその
トレーを受け取った。

川岸に転がっていたと、メモされていたその
検体には、泥と草とゴミが付着し河独特の
悪臭を放っていた。

作業員が回収するのも仕方ない位微弱な心音
に気が付いた俺の中で動いた何か・・・。

この髪なのか

それとも、この肌なのか

どうしても自分の物にしたい・・

そう思ったのは嘘じゃない。

必死に温めて、マッサージをして
点滴からの薬と栄養で、その瞼が動いたのは
あの夜から１週間が過ぎていた。

その間、俺は風邪をひいたと言って大学も
夜間担当もすべてキャンセルして・・

その身体の隅々まで、確認したんだ。

だから、俺は知っている。

こいつが誰なのか・・

そして、その身体の中から取り出した
マイクロチップ３個は

全て破壊した。

「はじめまして・・」、

さっき買ったシャツに着替えたその姿に
アースが口笛を鳴らす。

「おい、男だよな？」、

そう確認したくなるのも無理はない・・

長く伸びた黒髪と、光る瞳。

紅い唇に、男なら思わず手を出したくなる
ほど綺麗な肌。

けど

シャツから見える肌にも、傷がある。

「まあ、記憶が無いんじゃしょうがないけど
名前くらいないとなあ～」、

アースがちらっと俺を見て、確認を取るから
俺は、小さく頷く。

「何か、思い出す言葉はないのか？」、

心理学の分野にもたけているアースがそっと
彼の前にすわり、ゆっくりとその手を握り

「まずは目を閉じて、ゆっくりと息を吐く」

彼の心へと向かった。

数分・・

いや数十分・・

そのままジッとしていた二人。

アースは、揺れる彼をその手で支えながら
じっと閉じた瞳を見ている。

目が覚めてからの１週間、何も聞かなかった
俺に、何も言わなかった彼。

記憶が無いことだけは確かめてあった。

「暗闇しか・・・」、

ゆっくりと瞼を開けた彼は申し訳なさそうに
アースを見て

「ごめんね・・・」、

そして、悲しそうに笑った。

アースにも、俺にも

何かを思い出し、そしてそれをしまい込んだ
んだと分かったけれど

「そうか、仕方ないな・・」、

アースは、ぽんぽんっとその手を叩いてから
う～ん、っと悩んで見せて。

「じゃあ、すばる！って、どうだ？」、

グッドアイディア！　っとでも叫びそうな
勢いで

「す・ばる・・？」、

日本語でそう、答えた彼に

「そう、日本語のスバル！、その星の名前の
歌が、有名なんだぞ！」、

アースは、ウインクをして笑い、その歌を
唄い始めた。

彼の笑う姿を初めて見た。

しかし、相変わらず何にもない部屋だな

そう言いながらアースは部屋の中をうろうろ
している。

俺は買ってきた日用品をラッピングから出し
タグをはずし

ソファーで膝を抱えている、すばるに投げた。

きょとんっと固まった姿は日本人独特の幼さと
妖艶さを発するわけで、俺でなくてもその肌に
手を伸ばしたくなるのも仕方ないと思う。

受け取った下着やシャツを次々に自分に当てて

ありがとう・・

ぎゅと、それらを抱きしめて笑うその身体を
いつの間にか伸ばした俺の腕が
抱きしめていた。

おいおい・・

アースが、ヒュ～ッと口笛を響かせる。

無理に思い出さなくていい

いいからな

ここで暮らせばいい

俺はその背中を撫でながら

何故か、涙を流していた。

　おしゃべりなアースの付き合いをしていた　すばる

SUBARUは、そのままソファーで眠ってしまった。

暗闇に戻すのも可哀そうで、そのままそっと毛布を
かけると

あり・・がと・・

小さな日本語が聞こえた。

そんな俺の横で、タブレットを見ていたアースが

凄い奴を敵に回すぞ・・

今までに見たことの無い顔をしていた。

　「あっちに検査は入らなかったのか？」

リビングを出て研究室に移動した俺達の前には
この業界に配られている極秘書類がある。

　「運び出した朝、入れ違いに入った・・」、

書類を数枚めくって現れた笑顔の写真。

さっき、見たばかりの寂しい微笑みではなく

その視線の先にはきっと・・

愛するその男がいるのだとわかるほど
信頼と尊敬と、そして心からの愛があふれた
笑顔で

ぐしゃ！

思わず書類を握り締めた俺の手からアースは
ゆっくりと指を外し

「協力するぜ・・」、

ビンに残っていたワインを一気に飲み干した。

「おはよう・・」、

相変わらず朝の弱い隣の愛しい人の髪を
そっと書き上げて、かわいいおでこに
キスをする。

「ん・・ぁおはよう・・」、

もぞもぞと、シーツの中に潜り込むその
背中を追いかけて俺もまたシーツの中に
潜り込み

「もう少しだけ・・」、

昨夜、泣かせるだけ泣かせたその場所に
固くなった気持ちを押し当てて

「ゆっくり・・ね・・」、

すっと絡まった長い指が、確実に進める
そこへといざない

「ん・・」、

まだ残っていた俺の熱が、俺を受け入れる。

幼く見えるその姿からは想像ができないほど
甘く妖艶に動くしなやかな身体が、離さない
とでも言わんばかりに絡まって

「やばい・・もう・・」、

あっという間に高みに昇る俺の腿に、その
細い指の爪が食い込み

「まだ・・もっと・・」、

激しく締め付けられて、互いにのけぞった
その時

ダンダンダン！！！！

「朝ご飯だよ！！」、

また、地獄の朝を迎えた。

研究室で眠るようになって半年。
寝室を提供して半年といった方がいいか

とにかく、この半年・・

毎朝、繰り返される素晴らしい営み。

全てを知り尽くしている俺にとっては、その
身体のいたるところに俺の愛を注ぎ込み
俺だけの物にしてきた半年なのだ。

そう、毎晩、毎朝・・

夢の中で

そんなことを知る由もない愛しい人は

「ほら、早く食べないと遅れるよ～　」

って、ドアの向こうでやきもきしている。

「ああ、わかった・・今起きたから・・」、

そう返事をして、そのままトイレに飛び込んで

「せつない・・」、

最後の仕上げを自分でする。

誤魔化しのシャワーを浴びてすっきりしたら

「おはよう！」、

俺は、研究者の顔に戻って、椅子に座るんだ。

　「先生、お疲れの様ですね？」、

検体の準備をしている学生が心配そうに俺の
顔を覗き込む。

その向こうで、アースが肩を震わせている。

「心配いらないよ、ちょっと難しい研究に
取り組んでいるところだから・・」、

そう答えると

「どんな、研究なんですか？」、

生徒たちは興味津々で目を輝かせる。

「それはね～」、

ニヤニヤしながら近寄って来たアースが
生徒たちの方を掴んで

「この世のものではないものと・・」

いかにもホラーな言い方で、生徒達に悲鳴を
上げさせて・・

「はいはい・・始めるよ・・・」、

俺は、そこに横たわるご老人に十字を切った。

　検視報告書を書いていると、アースが椅子を寄せてきた。

　何かと、顔を上げるとその横には一人の生徒が立っていて、アースがぐいっと腰を掴んで自分の脚の上に座らせた。

「お・・おい・・」、

慌てて周囲を見渡すが、全ての生徒は廊下に出たあとで、この部屋の中にはほかに誰もいなかったが

「ちょっと、まずいだろ？」、

アースの手をほどいて生徒を押し返すと

「なんで？」、

今度は生徒からアースの首にその腕を巻き付けた。

「・・・・・・」、

固まってしまった俺に

「先生、ちょっとやばいでしょ？」、

その生徒が、つう～っと俺の腿に指を這わせ

「だよな～」、

アースも、マネをして指を這わせて、ぐっとそこを掴んだ。

「！！！！」、

声にならない叫びをあげた俺を二人は楽しそうに
ツンツンといじり

「今夜、少し気晴らししないか？　」、

そう、言って来た。

気晴らし・・

確かにこの数日、いや、数週間・・

何かのスイッチが入れば取り返しのつかない
事になりそうなほど、自分の中での高まりは
自制を超えている。

でも、独りにしておくわけにはいかず

遅くなるとか、連絡も出来ないし

一度帰宅すれば、あの笑顔を見ると出れない

・・・・・

ブツブツと、もやもやと、悩んでいる俺に

「先生、ホントにやばいんだね・・」、

かなり大きく膨らんだそこにゆっくりと手を
動かしたその生徒が

「ここでもいいけど？」、

きゅっと、その先に力を込めた。

「が！！まて！！！」、

気を抜いていたので、変な声が出そうになった
けど、思いっきり我慢して

「よしい！、遊びに行くか！」、

俺は腰を引いて、立ち上った。

　特別な回線を引いておけば良かった。

独り暮らしの時には考えもしなかった悩み。

　携帯とパソコンで生活が出来ていたし、
留守電など使ったこともなかった。

　今、部屋の中に電話が鳴り響いても彼は
絶対に出ない。

　携帯を持たせようと考えたが、新規のそれ
は、ビル内でのセキュリティー上、管理されて
しまう恐れがある。

　主のいない部屋からの通信は一番目立つ。

　伝書バトでも飛ばしたいところだが・・

帰ってから食べればいいさって、毎日用意して
くれる夕飯を目の前で振り払い

「よし！行こう」、

俺は久しぶりの街へと繰り出したんだ。

久しぶりの

ほんの少しの

その行動が

クラブで腰を振る女の子に囲まれながらも
カウンターの綺麗な男の子を物色する事、
既に１時間。

なかなかその気になれないのもあるが、
好みの首筋が見つからないのも事実で
俺はまず、後姿の幼さと、首筋に比例する
あれの綺麗さにこだわる。

いかついのや、黒すぎるのとか、もちろん
使い込んだのはごめんだ。

「クラブに来るような子に、そんなのは
いるわけがない！」、

呆れるアースは、女の子の輪の中へ飛び
こんで、日頃のストレスを発散させている。

「仕方ない・・あの辺で手を打つかな・・」、

とりあえず、お金で何とかなりそうでいて
華奢な青年に声を掛けようとしたその時

ブルブルブル・・・・

携帯が勢いよく震えた。

表示された画面の文字は

”研究室のあるビルの管理番号”で、

なぜか嫌な予感がして、アースの元へと
走り出していた。

消防車と、警察車両に野次馬や報道。

ビルのある一角に延びる道路は封鎖されて
俺達はそこにいる消防本部に身柄を証明し
その先の関係者ラインまで進めた。

「先生！」、

「教授！！」、

俺を見つけた警備員達が駆け寄って来た。

「外出されていてよかったです！
あの時間いつもはもう、お部屋にいらっしゃ
るから、慌てましたよ～」、

俺の無事を確認して、ほっとしているのは
わかるが、俺達には言えない秘密がある。

「爆発したのは、上のラボなのか？」、

ビルを見上げる俺の横でアースが消防関係者に
詰め寄っている。

「何階ですか？」、

逆に聞き返されて、ちらっと俺を見て

「１１階だ・・」、

アースは、消防関係者のバインダーを覗きこんだ。

「先ほど、セキュリティーが解除されて、１１階
までの安全は確認されましたので、研究室には被害
は無いと思われます。」、

「・・・え？・・解除って・・」、

警備員の服を掴んで詰め寄った俺を、アースが
その間に割り行って

「研究室にも入ったのか？」

「もちろん、生存者等の確認もありますので」、

消防関係者と警備員が、何を驚いているのかと
不思議そうに俺達を見た。

「け・研究資料には触っていないよな？」

アースが機転を利かせてそう聞くと

「もちろんです、何にも被害の無いことを確認して
次の階に行きました」、

消防関係者のその答えに、俺達は表情を変えずに
驚いていた。

このビルの、研究室はワンフロアを研究者ひとりで
使用している。

エレベーターは人間用が１機

業務用が３機

全てに、防犯カメラが付き、なおかつＩＤを持たない
物の侵入は警報が鳴る。

消防隊の侵入時に、そのセキリティーが一時、切断
されたとしても、逃げ出てきた人間の掌握はされて
いるはず。

俺は近くに固まっている避難者と思われる毛布を
肩にかけている人達の中に、その姿を探した。

スプリンクラーの作動もなく、消防による室内の
物色もなかった部屋の中に入れたのは、翌朝で、
ピッと、解除された部屋の中には、その

愛しい人の姿は無かった。

「どうやって・・」、

寝室の入口で、立ちすくんでいる俺の横に並んだ
アースが、声を詰まらせたが、もう、二度と
その姿を見る事は出来ないのだと、
その姿を探すことも出来ないのだと

俺はその場に崩れ落ちた。

今夜は残業なのかな・・

いつもならとっくに帰ってきている教授の
姿はまだない。

最近は、なぜかアースさんが一緒に帰宅する
事が増え、僕の料理でワインを飲んで、その
まま研究室のストレッチャーの上で眠って
しまうこともある。

一番最初にあった時に、僕の心の中へと
入ってこようとした。

でも、その一回だけで、二人は何も聞かずに
ずっと僕を家族のように、空気のように
優しく、暖かく、そっと守ってくれている。

僕は、ここにいてもいいのだろうか・・

何度も悩んで

何度もナイフを掴んだけれど

二人には迷惑を掛けたくない

そのまま、甘えて過ごした数か月

空調の効いたこの研究室にいると季節は
全く分からないのだけど、出かける教授の
服装で、あれからの時間の流れが嫌でも
想像できてしまう。

少し休もうかな・・

僕はシーツの中へと身体を埋めた。

ぽん！

僅かな振動と、カーテンの隙間から差し込んだ
綺麗な光

はなび・・

ここに来て直ぐにも、同じ光を見たっけ

ゆっくりとその小さな窓に近寄って、いつもは
開けないカーテンを少しだけ寄せて

ぽん！

少し離れた場所で上がる花火が見えたその時

バン！！

研究室が振動する音と、微かな揺れ

そしてもう一回

バン！！

天井が響いた。

数秒の振動の後、聞いたことの無い警告音が
鳴り響いた。

さっきの状況は、多分この研究室よりも上で
何かが起きた音。

もう一度、小さな窓に飛びついて周囲を見下ろ
して確認すると、この施設を取り囲むように
めぐらされている道路に、赤、青、黄色の
ランプが近づいてくる。

爆発か、火災か・・

今の所スプリンクラーは作動していない。

教授の研究室も、異常も変化もない。

でも

もし、緊急事態でここに誰かが侵入して
来ることがあるならば

また、迷惑をかける

このセキュルティーでは、侵入できない。

とゆうことは、このセキュリティーが解除
されるはずで、その瞬間はもうすぐだという
事。

僕の痕跡を消さなきゃ

目の前にあったランドリーバッグに手当たり
次第、シャツや下着、歯磨き、それらを突っ込
んで

履かせてもらうね・・

ここにきて直ぐに貰ったプレゼントの箱を開け
真っ白なデッキシューズを履いた。

消防が入るなら、エレベーターと階段は
鉢合わせる可能性が高い。

教授の話では、このフロアーには他に
入居は無くて、業務用エレベーターが数機
あるはず。

解除されれば、監視カメラも一時的に停止
されるだろうが

ダメだ

もしもの時には、映ってしまう。

アースさんの忘れ物のキャップを深く被り
研究室の厳重なロックのかかったドアの前に
立った僕は、セキュリティー解除の瞬間を
待ちながら、ぎゅっとランドリーバッグを
握りしめた。

なるようになれ・・

と、その時

ジッと見つめていたロックパネルがピ！っ
と、音を鳴らして、全点滅した。

緊急放送が、いろんな国の言葉で流れる。

きっといろんな国の人達がいる、特殊な建物
なのだろう。

放送が終わると、点灯していたパネルの光が
消え、電源が一斉に落ちた。

僕は、そのドアレバーをスライドさせて

初めてこの部屋を出た。

解除されてから、始動されるまで

きっと数分・・いや数秒で、エレベーターや
階段で消防隊が上がってくる。

２０ｍほどある廊下に出た僕は、どうしていい
のかわからずに、キャップを深くかぶり

あ・・

そのまま、廊下の突き当りにある四角い窓を
目指した。

５０ｃｍほどのダストシューターと、それよ
りも少し大きめなランドリーシューター。

ここの高さを考える余裕もなく、僕はその
ランドリーシューターの中に飛び込んでいた。

奇跡かもしれない

多分、１０階以上の部屋だったと思う。
何度か切れたと思う瞬間があったけど、僕は
鈍い衝撃の後、柔らかな塊に包まれて

収集日前だったと思われる洗濯物の山の
中で深呼吸した僕は、わずかに入る収集口の
ドアの光で、そこにある袋の中を物色して

ごめんね

教授の買ってくれたシャツを脱ぎ

その扉から外に飛び出した。

肩にかけられたバスタオルのような布に
包まれて沢山の人が集まっている。

僕もその中へと案内されたけれど、多分
身元の確認をされるはず。

今ならまだ、周囲が騒然としている為に
確認作業は始まっていない。

僕は、その場にタオルを置き、そっと
その場を離れた。

「あ、お嬢さんどこへ？」、

近くにいた紳士が声を掛けたので

「ちょっと、トイレに行きたくて・・」、

前髪に顔を隠しながら軽く頭を下げると
その人は驚いた顔をして

「これ・・」、

僕の手に携帯を握らせて、早くいけ！っと
僕の背中を押した。

少し先の倉庫の陰で周囲の様子を伺った。

防犯カメラの類に少しでも映れば、すぐに
ばれてしまう。

探していればの話だけど・・

そんなことを考えて、少しだけ彼の事を
思い出した。

今頃、もう僕の事は忘れてあの婚約者の
彼女と幸せな家庭を築いているだろうと
思う気持ちと、必死に僕の事を探してい
てほしい・・

そんな我儘で、切ない心がキリキリと
痛む。

俯いた僕の足元に、涙がぽたぽたと落ちた。

あれから、泣くことも忘れて生きてきた。

思い出すまいと、記憶も封印して・・

ぐっと唇を噛み、もう一度踏み出そうと

顔を上げた僕の、いや、あのランドリーの
中から借りたワンピースのポケットで
さっき、渡された携帯が震えた。

”その先のクラブに行きなさい”

そして、そこまでのルートの地図が
一緒に送られてきた。

もしかしてＧＰＳ？

しまった、そう思いその携帯を捨てよう
としたその時、もう一度携帯が震えた。

”信じなさい”

さっきの紳士の顔を思い出す。

なぜか、悪い人には思えなくて・・
僕は、その店へと歩き出した。

少し離れたビルの隙間に

はなび・・

数時間前に、教授の部屋で見ていた花火が
見えていた。

「今日もどうだ？」、

帰り際に声を掛けるのが日課になっている。

「いいけどな・・」、

アースの答えも毎日、決まっていて

「今夜も研究ですか？」、

警備員も、毎日同じ挨拶をする。

「あ、そうだ先生これこれ」、

警備主任が部屋の奥から何やら荷物を
持って出てきて

「ランドリーの荷物がやっと届いたんですよ」

そう言って、俺の部屋のナンバーの付いた
袋とラッピングされた衣類の入った紙袋を
アースに持たせた。

「なんで俺？」、

文句を言いながらその紙袋を覗きこんだ
アースが、目を真ん丸にして俺を見て

「これ・・」、

そしてその袋を俺に見せた。

部屋に入って俺達はテーブルにそっと
洗濯物を並べた。

白衣

シーツ

ワイシャツ

確かに俺が、ランドリーボックスに投げ入れ
て出かけた。

あの日に。

ただ、そのほかの物は俺じゃない。

Ｔシャツ

デニムパンツ

ボクサーパンツ

そして、白いデッキシューズ

何もかも置いて、全てを洗い流し

その痕跡を消していったあいつ

「おいこれ・・」、

シャツのビニールを開けたアースが
それを広げて

切れた袖と背中。

そして、洗濯で落ちきれなかった血液の
あと・・

「洗濯されると思わなかったのかな」、

アースはそれを俺の胸に抱きしめさせ

「あいつの気持ちだよ」、

ポンポンっと俺を抱きしめた。

消えなかった血液。

店の人が、想いを残したのか・・

そのシャツの胸に残るシミは

とても綺麗なハートだった。

Ｆｉｎ。